

鹿児島県立与論高等学校

校長通信

第4号(令和6年9月20日/校長 大倉秀心)



校訓「好学 創造 親和 不屈」

鹿児島県大島郡与論町茶花1234番地1



電話 (0997) 97-2064

FAX (0997) 97-2844



学べる幸せ

全校生徒が参加する大きな行事の一つである文化祭も終わり、3年生はいよいよ自分の次の進路を決める重要な時期に突入しました。目標突破に必要な課題を設定し、これまでの学習からさらにギアを一つあげて、愚直に学習を進めてください。皆さんには繰り返し伝えていますが、最後に合格を手にするためには圧倒的な「座学力」が必要であることは、時代や学校が異なっても共通している真実です。自分が望む成績が今出ていなくても、諦めずに努力を継続することが何よりも大切です。共通テストの出願等、ミスが許されない行動がこれからは必要になります。気持ちを一層引き締めて日々を過ごしてください。

先日、本校卒業生も在籍している予備校から毎月送られてくる便り(新聞)が届きました。以下の言葉が目に残りました。

「...授業を軸にした学習サイクル『予習→授業→復習×3...覚え込み→運用』というカリキュラムに沿って、『基礎基本の定着をする第1学期』さらに『弱点補強と不得意科目の克服を行う夏期講習会』の過程を一步ずつ着実に進めてまいりました。...」

以前勤務していた学校でも浪人生たちに話を聞くと、現役時代と浪人時代の最も大きな違いは復習の量だと言っていたことを思い出します。こんなにも徹底して復習をしているのだと。大学入試は現役・浪人など関係なく、点数には何のハンデも加えられず公平に扱われるわけですから、受験の厳しさを経験していない現役生は特に気を引き締めて残りの数ヶ月を過ごさなければなりません。上で紹介したような学習を積み重ねてきた浪人生たちに入試で上回るには、今の自分にどんな学習が必要かを考え、彼ら以上の努力をすることが必要になってくることは言うまでもありません。特に本校は、周囲に他の高校はなく、「よく勉強しているライバル」というものを日常目にすることがありません。焦りを感じなくて済むと考えれば気持ちも楽になるかもしれませんが、そんな考えを持ちながらほどの学習だけをして上級学校への入試を突破できるほど世の中は甘くはないのです。では、「よく勉強しているライバル」をどこで感じればよいか。近くに別の学校がないならば、自分たち一人一人がお互い

「頑張ってるな」と感じられるくらい勉強すればいいのです。友人たちの背中を見て、「自分も負けられない」という気持ちになり、努力を継続できたという話は、強い高校ではよく聞く話です。お互いの姿から刺激を得られる理想的な関係です。まだまだ与論では暑い日が続くかもしれませんが、猛暑だった7~8月ほどではなくなってきています。放課後の教室や図書室等、学校を利用できる時間はフルに活用し、帰宅後さらに学習を続ける強さを身につけてください。それと同時に、以下の記事を読んで、今皆さんが何不自由なく学習できる幸せを感じてほしいと思います。



「ウクライナから避難 “日本で夢をかなえたい”
春から大学進学の高校生」

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻から2月(2024年)で2年。ウクライナからは多くの人が日本に避難し、いまも2000人あまりが暮らしている。その中に、都立高校に通いながら学び続け、この春、日本の大学に進学する高校生がいる。ミラーナ・アズィマさん。外国籍の生徒を多く受け入れている都立高校に入学を認められ、日本語を一から学びながら、英語などの教科の勉強も続けてきた。

おとし起きたロシアのウクライナ侵攻で、首都・キーウで高校に通っていたミラーナさんの生活は一変した。優秀な成績を収めていたミラーナさんは、現地の大学への進学も決まっていたが、断念せざるを得なくなった。地下に避難しての生活が続く、先行きが見通せない状況にふさぎ込む日々が続いたという。そして、おとし4月、母親・マリナさんの日本に住む友人を頼って、2人で来日。もともと日本のアニメが好きで、興味があったというミラーナさん。都立高校で学びを再開させると、新しい生活や出会いの中で気持ちが前向きになり、日本で大学進学を目指すことに決めた。

3月、この高校を卒業するミラーナさんにはウクライナにいたときから目標にしてきた将来の夢がある。38年前、キーウの北にあるチョルノービリで起きた原発事故。事故後、周辺の住民の間では健康被害が報告

されている。ミラーナさんは、一緒に暮らしていた祖母をがんで亡くし、放射線が人体などに与える影響をもっと知りたいと、研究者を志すようになった。

日本で勉強を続けてきたミラーナさんに、うれしい知らせが届いた。都内の大学への合格通知。母語ではない英語も猛勉強し、英語で数学や科学などの試験を受けて合格した。春からは、アルバイトをして生活費を稼ぎながら、目標にしていた放射線について学ぶことになる。

「将来は、ウクライナの人だけでなく、世界中の人のためになる研究成果を出して、いまは『ウクライナは戦争が起きている場所だね』と言われるが、そうではなくて、『ウクライナは、こんなに素晴らしい研究をした、ミラーナという研究者の出身地だ』と言われるように頑張りたい」

(NHK千葉放送局「ちばWEB特集」2024/2/22
一部表現を省略・簡略化しています)

伝統と人間性

9月17日(火)、国指定重要無形民俗文化財「与論の十五夜踊」を初めて見ました。毎年旧暦の3・8・10月の各15日に、地主神社に奉納される踊り。永禄4年(1561年・室町時代)に当時の与論島世之主が島中安穏、五穀豊穰、無病息災を祈る祭事として、与論島内・奄美群島・琉球・大和の芸能を学ばせ、一つの芸能にまとめあげたものだそうです。460年余りもの長い間、与論に住む先人たちが引き継いできたことを思うと、その時間的なスケールの大きさにロマンを感じます。日本各地で担い手不足などが理由で伝統芸能が次々と消えていく中で、十五夜踊りを絶やすまいと伝承に取り組んでいる保存会の皆さんには頭が下がります。同時に、今与論に住む者として、この祭事が持つ意味を深く理解し、保存に協力することが必要だと強く感じました。生徒の皆さんの中にも探究活動のテーマとして取り上げている人もいますが、有意義な探究になることは間違いないでしょう。

踊り手は二番組と一番組に分かれ、双方が交互に踊りを奉納していきます。二番組の演目は与論島内・奄美群島・琉球の芸能を取り入れた奄美・琉球風の手踊り・扇踊りで構成されており、踊り手の一心に祈りを込めて踊る様はゆったりと優雅で美しく、演目の歌詞も恋や自然を謳いあげた唄だそうです。一番組の演目は能・狂言を取り入れた大和・本土風のせりふ劇と歌踊りから構成され、勇敢な踊りやこっけいな仕草で笑いを誘ったりと幅広



い演目で楽しませてくれました。

特に一番組のちょっとコミカルな演目を見ながら感じたのですが、与論出身の人の中に陽気でユニークな方が多いのは、この十五夜踊りが連綿と受け継がれてきたことと関係があるのではないかと思います。与論の先人が作り上げた十五夜踊りを絶やさず受け継いでいるからこそ、その人たちがより「与論の人らしく」なるということです。伝統芸能を作るのは人ですが、逆に伝統芸能がその地域に住むその人らしさを作り上げるということです。そんなことを考えていたら次の言葉を思い出しました。

"We shape our buildings and afterwards our buildings shape us." (建物を作るのは我々人間だが、時がたてばその建物が我々がどんな人間であるかを決めるのだ)

これはイギリスの首相チャーチルが、第二次世界大戦中にドイツ軍の空襲によって大きく破壊された国会議事堂を建て替える際に言った言葉です。この時、これを機会に議場を新しいモダンなスタイルにしようという意見もありました。当時世界各国でもてはやされていた大きくて威風のある半円形の集会場デザインです。

しかし、チャーチルは国会議事堂はこれまでと同じデザインにするべきだと主張しました。ベンチが所狭しと並び、小規模で与野党が対面する、ギチギチに詰めて座られるデザインです。「大きすぎる議場は良くない。すぐに満員になるような小さい部屋だからこそ議論は白熱する。それが民主主義にとって重要。出席している議員一人一人が自分事として討論に参加でき、重要性や緊迫感が増すのだ。第一、広すぎては大声で話さなければならない。大声をあげては冷静な議論ができない。」これが理由だそうです。さすがは大人の国・ジェントルマンの国ですね。広い議場の自分の席で会議中にゆったりと居眠りをしているどこかの国の議員たちとは大違いです。

十五夜踊りを守るとも、建物のデザインを守るとも、伝統を受け継ぐ今を生きる人たちが、未来を生きる人たちの人間性までも形作るという点では共通しています。そんな守るべきものが残っている与論に住んでいる皆さんは幸せなのだと思います。

(「祈り踊り継ぐ 与論の十五夜踊り」ヨロン島観光協会、「チャーチル『建築が私たちを形作る』英国国会と民主主義」globalpea.com を参考にしています)